

当院外来 OT における脳卒中患者の自動車運転再開の実態について

市川 彩湖、中島 美和、関 優一郎
近森リハビリテーション病院

KeyWord: 脳卒中、自動車運転、外来リハ

【はじめに】

近年、作業療法士が脳卒中患者の自動車運転の適性評価や再開支援を行う機会が増えている。当院外来作業療法（以下外来 OT）でも自動車運転再開目的とした脳卒中患者が過半数を占め、神経心理学検査、ドライビングシミュレーター（以下 DS）での評価や模擬練習、教習所での実車評価 / 練習を実施し、結果を医師に報告している。しかし運転再開後の状況については、モニタリングを実施しておらず不明確である。今回、当院外来 OT における脳卒中患者の適性検査後の運転状況を調査分析し、現状と課題について報告する。

【方法】

対象は 2021 年 1 月 1 日～同年 6 月 30 日までの期間、当院外来 OT を自動車運転再開目的で介入した脳卒中患者かつ診断書作成に至った 20 名（男性 12 名、女性 8 名、平均年齢 59.3 ± 13.1 歳、発症～診断書作成までの期間：平均 240.6 ± 187 日）。方法は支援内容をカルテから後方的に調査するとともに、同意の得られた対象者に適性検査後の運転状況について、電話での聞き取り調査または郵送でのアンケート調査とした。アンケート項目は ①適性検査合格の有無 ②運転再開の有無 ③運転再開の時期 ④運転目的 ⑤運転の頻度・時間・時間帯 ⑥病前との比較（疲労感・不安感・判断の遅延・ハンドルやペダルの操作のしづらさ・行動範囲の狭小化）⑦運転再開後の事故や違反の有無とした¹⁾。

【結果】

医師の指示のもと、神経心理学検査、DS にて評価 / 模擬練習を実施。教習所での実車評価 / 練習を実施したのは 8 名で、うち OT が同行したのは 1 名のみであった。アンケート調査は 18 名から同意が得られ、適性検査合格 17 名、運転再開者は 15 名であった。運転再開時期は翌日～2 週間以内が 14 名、1 人で運転 14 名、病前との変化あり 9 名であった。変化ありの内訳は不安感 7 名、行動範囲の狭小化 4 名、疲労感 3 名、判断の遅延 3 名、操作しづらさ 1 名、軽微な事故 1 名の順に多く、違反者は 0 名であった。

【考察】

今回の調査では回答の得られた約 8 割が運転を再開し、そのほとんどは 2 週間以内に運転を再開していた。その一方で再開している対象者の半数以上は、病前と比較し何らかの変化を感じていることが分かった。運転時の疲労感や操作性の低下を感じている者は少ないが、漠然とした不安があり必要時以外は運転をしない、病前より慎重に運転している者が多い傾向がみられた。また行動範囲の狭小化ありと回答していた全例は不安感があると回答し、教習所での実車評価 / 練習を実施した 8 名中 6 名は、運転再開後も不安があると回答していた。長野らは「実際の生活場面で生じたことに対してセラピストからフィードバックやアドバイスを与えて、体験的に障害認識に結びつけた方がより認識をスムーズに進めることができる」と述べており、実体験での認識の重要性を示唆している²⁾。今回、教習所での実車評価 / 練習の OT 同行は 1 名のみで、実車場面での OT の専門的評価や助言は不十分であった。今後は神経心理学検査や DS での評価 / 練習だけでなく、実車練習に OT が同行する機会を増やし、教習所と OT 双方の視点から評価・助言していくことで対象者の不安軽減にも繋がると考える。そのためにも実車評価や練習が必要な対象者の判断基準や、OT が同行する際のマニュアル・評価チャートの作成が課題である。また適性検査後のモニタリングを継続し、安全運転への意識を高める支援へ繋げていけるよう働きかけていきたい。

参考文献：¹⁾ 上谷祐貴 脳卒中ドライバーへのアンケート調査 ²⁾ 長野友里 高次脳機能障害の awareness